

第15回学術コミュニケーションセミナー（月刊JPCOAR）

# 実務事例紹介(1)

---

神戸大学附属図書館 鈴木雅子



# JPCOARさまからの依頼

- 管理職としての立場からリポジトリ運営について
- リポジトリやオープンアクセス・オープンサイエンスを担う図書館の管理職としてどのような点に注意を向けて仕事をしているか
- 可能であれば現在の運営の話
- リポジトリ黎明期からの経験を踏まえて、  
「今後の展望」

実務事例紹介..だよね



# 機関リポジトリとの関わり

---

2004-2005年	北海道大学	HUSCAP
2007-2009年	小樽商科大学	Barrel
2010年	北海道大学	HUSCAP
2011-2013年	旭川医科大学	AMCoR
2014-2016年	静岡大学	SURE
2019年	国立情報学研究所	機関リポジトリ
2020-2021年	名古屋大学	NAGOYA Repository
2022年	神戸大学	Kernel

# 2004-2005年 北海道大学HUSCAP

国立情報学研究所メタデータ・データベース共同構築事業

## 学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト

トップページ

目次

DSpace及びEPrintsに関する技術資料

参考文献・関連資料

活動記録

NII-IRPワークショップ  
(2004.6.14-19 東京・長野)

中間報告会 (2004.9.7 東京)

SPARC & SPARC/Europe  
"Institutional Repositories :  
The Next Stage" 出展  
(2004.11.18-19 ワシントン  
DC)

スティーブン・ハーナッド氏との懇談会 (2004.11.24-25 東京・神奈川)

報告会 (2005.2.10 東京)

NII-IRP報告書

### スティーブン・ハーナッド氏との懇談会

学術機関リポジトリの構築推進に係る知見を深めることを目的とし、平成16年11月24日(水)に学術機関リポジトリ及びオープンアクセス運動に造詣の深いスティーブン・ハーナッド氏との情報交換・意見交換を行いました。併せて平成16年11月25日(木)には氏を講師とする第6回図書館総合展フォーラム『学術コミュニケーション最先端：オープンアクセスとセルフアーカイブ』(於パシフィコ横浜(神奈川県横浜市))を聴講しました。

資料

- Stevan Harnad. 懇談会及び図書館総合展フォーラム発表資料 (PDF 9.2MB)
- 国立情報学研究所開発・事業部コンテンツ課. National Portal to University Institutional Repositories (PDF 56KB)

### スティーブン・ハーナッド氏について

スティーブン・ハーナッド <http://www.ecs.soton.ac.uk/harnad> はハンガリーに生まれ、学部教育をマギル大学で、大学院教育をプリンストン大学で受け、現在、モントリオールのケベック大学で認知科学のカナダ政府研究教授(Canada Research Chair)の称号を有している。研究の内容は、カテゴリー化、コミュニケーションおよび認知である。Behavioral and Brain Sciences誌 <http://www.bbsonline.org/> (これは、Cambridge University Pressが刊行する紙媒体の雑誌である)。また、Psychology誌 <http://psycprits.ecs.soton.ac.uk/> (こちらは、アメリカ心理学会が支援する電子ジャーナルである)およびThe CogPrints Electronic Preprint Archive in The Cognitive Sciences <http://cogprints.ecs.soton.ac.uk/> の創設者であり、編集人であり、また、the Society for Philosophy and Psychologyの元会長である。150本以上の刊行物の著者または投稿者であり、そのなかには次のような著作等が含まれる。Origins and Evolution of Language and Speech「言語の起源と進化」(NY Acad Sci 1976)、Lateralization in the Nervous System「神経系の機能分化」(Acad Pr 1977)、Peer Commentary on Peer Review: A case Study in Scientific Quality

## システム管理系の係員

NIIのプロジェクトのお世話になり、  
無料ソフトDSpaceでリポジトリ構築

スティーブン・ハーナッド氏の講演を  
聞き衝撃

- 機関リポジトリはEJ論文が読めない問題への対抗策。  
研究者が自著論文をオープンにすれば解決

- ◆ 出版社(エルゼビアも) OK
- ◆ 研究者は勿論OK
- ◆ **後は図書館がやるだけだ!**



<https://professeurs.uqam.ca/professeur/harnad.stevan/>

# 2004-2005年 北海道大学HUSCAP

## 学術情報の発信に関するアンケート調査（集計）

附属図書館では、教員各位のご理解・ご協力のもとに電子ジャーナル・各種DBの導入をはじめとする学術情報の利用環境整備に努めているところですが、近年、情報受信の環境整備だけでなく、大学が大学自身の研究成果等を積極的に収集し、広く社会に発信してゆく体制についても強く求められるようになってきました。科学技術・学術審議会が1002年3月に公表した『学術情報の流通基盤の充実について（審議のまとめ）』の中でも、附属図書館を中心とした情報関連組織の連携による統一的な発信体制の確立が各大学に要請されています。（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/toushin/020401.htm)）

附属図書館では、この要請に対する取り組みの一環として、大学等がその機関内で生産された電子的学術情報を蓄積・保存し、効果的に発信するシステムとして注目されている「学術機関リポジトリ（電子保存庫）」システムの本学における有効性の検討を進めています。

このたび、学内の学術情報の電子化とその発信に関する教員の方々の意欲やご意見を伺い今後の検討の参考に資するため、本学所属の助手以上の教員全員を対象として、下記の通りアンケートを実施させていただきました。

調査期間 平成16年11月29日～12月10日

調査対象 本学全教員（助手以上の現員 2142名）

回収枚数 466枚（ほか研究員、院生・学生・研究生等 42枚）12/20現在

回収率 22%

アンケート調査結果の概要は下記の通りです。各調査項目とその集計値については、[次のページ](#)（PDFファイル 14KB）をご覧ください。

**設問1] 作成または作成に携わった電子的な学術情報をお持ちですか？それはWeb上で公開されていますか？**

70%以上の336人の方が電子化された学術情報を持っているという結果であった。「商業誌・学会誌に掲載された論文」は「外部のサイトから公開している」場合が最も多いのに対し、他の学術情報は「公開していない」割合が最も高くなっている。そのデータ形式は、77%がPDFで、次いでHTMLとMS Wordが20%、PowerPointが17%と続いている。

**設問2] オープンアクセスの考え方についてどう思われますか？**

11%の方が「賛同しすでに実践している」という回答であった。「賛同するが実践はしていない」が54%で最も多く、「機会があれば実践したい」26%と合わせると、91%の方がオープンアクセスの意義を認めている。

**設問3] 学術機関リポジトリが構築された場合、ご自身の学術情報を登録して情報発信することについてどう思われますか？**

「賛同するので登録したい」が70%、「賛同するが登録したくない」が14%、「賛同できない」が3%という結果であった。残りの13%の「その他」の意見は、そのうち約半数が、著作権問題がクリアなこと、負担が軽いこと等の条件付きで登録したいという意見、40%が現時点では判断できないという意見、10%が否定的な意見であった。

2022/12/20

月刊JPCOAR

## システム管理系の係員

当時の課長から言われたこと1つ  
「学内アンケートやろう」

<https://www.lib.hokudai.ac.jp/item/enq/kekka.html>

- OAの意義を認める方多数、リポジトリで情報発信したい方多数 → 進める根拠
- OAの状況（エルゼビアも認めている等）や図書館がこれからやろうとしている事を広報できた
- ご意見伺うために連絡して良い

体制：係長1係員1+WG



# 2004-2005年 北海道大学HUSCAP



全国のリポジトリ担当者間で  
情報共有、切磋琢磨

- 前頁の学内アンケートで連絡しても良いと言ってくれた先生に片っ端からアタック
- 名称、キャラクター、ポスター、グッズ、規程類等の作成
- 説明会
- 学術情報流通の世界を「寸劇」で説明（サイエンスカフェ）
- 登録した論文の出版社条件を蓄積  
体制：係長1係員1+契約職員2

# 余談：2006年 HUSCAP園芸部



祝HUSCAP収録文献50000件！ (July, 2016)

2006年4月 >>

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

2006年04月

2006年04月27日

星野先生講義

私たちがこっそりハスカップ先生と呼んでいる、北方生物園フィールド科学センターからのハスカップの育て方を教えてもらいに行ってきました。実らせるには、がんばろー、園芸部！



x822gaz at 20:52 | [Permalink](#) | [Comments\(1\)](#) | [Track](#)



# 2007-2009年 小樽商科大学Barrel

小樽商科大学学術成果コレクション  
Otaru University of Commerce  
Academic Collections

## Barrel

国立大学法人  
小樽商科大学

小樽商科大学  
小樽商科大学附属図書館  
小樽商科大学研究者総覧

トップページ

記念インタビュー一覧

- ・ 記念インタビュー
- ・ 2019新任教員インタビュー
- ・ Barrel10周年記念インタビュー
- ・ 5000件突破!!記念インタビュー
- ・ 4900件目 辻義人先生
- ・ 4800件目 坂東誠介先生
- ・ 4700件目 北川泰治先生
- ・ 4600件目 小林敏彦先生
- ・ 4400件目 杉村泰教先生
- ・ 4300件目 田林洋一先生
- ・ 4200件目 片岡正光先生
- ・ 4100件目 國武英生先生
- ・ 4000件目 江頭進先生
- ・ 3900件目 高井健悟先生
- ・ 3800件目 高井 收先生

統計

利用統計

学内の方へ

- Barrelに寄る書
- 新刊書には
- 出版社のポリシー
- 世界の状況

Barrelトピックス - Mozilla Firefox

http://barrel.hokuraku.ac.jp/library/3100thInterview.jsp

Q: 登録3100件目の論文「CSRと経営戦略：CSRと企業業績に関する実証分析から」は、どのような内容ですか？

大まかに二つのパートに分かれています。前半では、近年、実際のビジネスの現場・学術研究分野を問わず大いに注目されているものの、曖昧でよくわからないCSRの概念を自分なりに整理した上で、CSRを経営戦略の観点から捉えるためのフレームワークの一つを提示しています。経営戦略とは、種々簡単に言えば「企業が経営を行う上での目的の決定とそれを実現するためのシナリオ・方針・設計図」のことなのですが、戦略が成功するためには、大きく分けて企業の外部環境に向けての条件と内部環境に向けての条件の二つが必要になります。一側で、前者が市場における企業の位置づけという意味

来年から私を指導教員として、中国の留学生の方から研究生の申し込みがありました。Barrelで私の論文を読んで申し込みをしてきたとのこと。Barrelがなければこういうことも起こらなかったかもしれません。人と人をつなげるという意味でもよいシステムだと思います。

## 参考調査係長（雑誌ILL貴重書等担当）

リポジトリは所属教員の論文をより多くの人に見てもらおうためのサービス

- 北大の先生がサービスを受け、樽商の先生は受けられないのはおかしい

## NIIのCSIプロジェクトのお世話になり、

- DSpaceの外注構築、研究者ページ
- すごい量の紀要を外注電子化して公開
- 登録100件ごとに記念インタビュー
- ※公開論文を見て研究生として来た学生も

## 体制：係長3係員2による担当者制

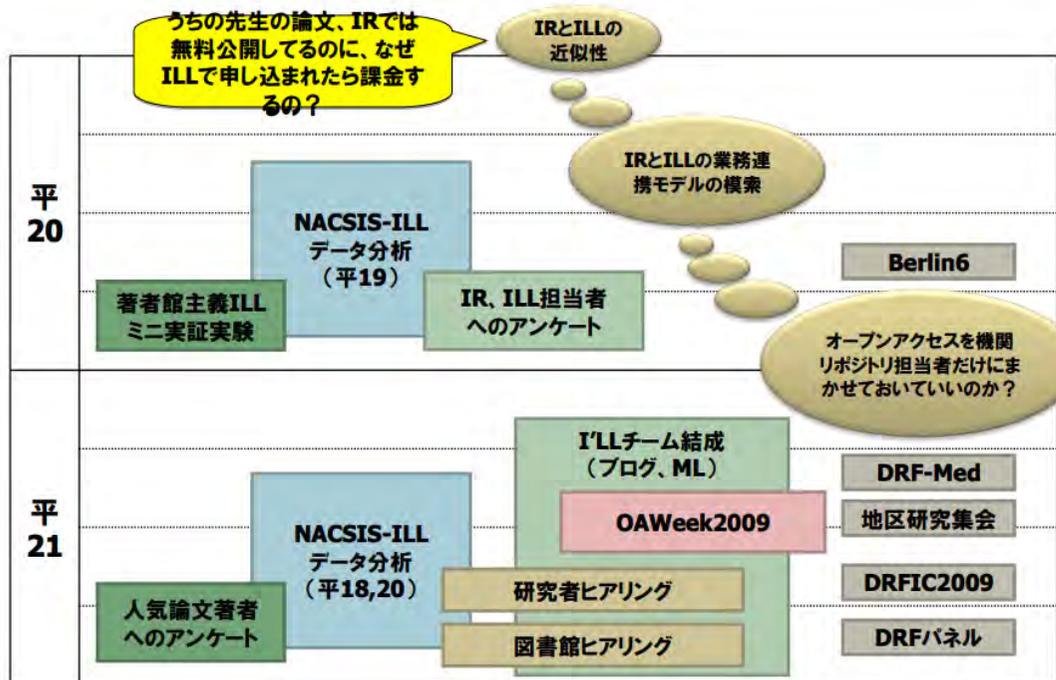
- 呼びかけからファイルを貰って登録まで



# 2008-2009年 IRcuresILLプロジェクト

## IRcuresILL

学術情報資源共有のための図書館間文献デリバリーサービスを機関リポジトリ構築によって代替するための教員・図書館連携方式の開発  
小樽商科大学、北海道大学、千葉大学、金沢大学、大阪大学、広島大学



## 小樽商大の係長が主担当

ILLで求められる論文を機関リポジトリで公開していくのがよいのでは？



機関リポジトリの活動は、リポジトリ担当者だけに任せず、図書館員全体で担当した方が効果的では？

- ILL、メタデータ付与
- 教員が求めるサービス展開
- 学修支援、研究支援



# 2010年 北海道大学HUSCAP

## システム管理係長

北大に戻ってきたら先生方が遠い…

- → 「いいとも作戦」で先生方にインタビュー
- 5周年記念イベント

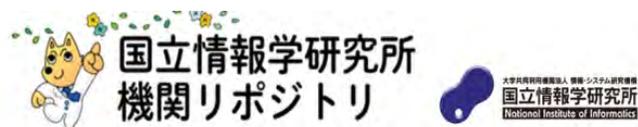
当時の部長の英断により担当を大幅拡大

- システム管理係がHUSCAP運用、統括
- 論文登録を各部局図書室が担当

体制：係長1係員2+各部局図書室職員！



# 2019年 国立情報学研究所機関リポジトリ



WEKO

トップ コミュニティ ランキング

入力後、Enterキーを押下し検索してください

検索

詳細検索

全文  キーワード

インデックスツリー

- ▷ 学術論文
- ▷ NII刊行論文集等
- ▷ NIIテクニカル・レポート
- ▷ 紀要等アーカイブ
- ▷ データ・プログラム等
- ▷ 教材等
- ▶ 事業・サービス
- ▷ イベント
- ▷ NII Today
- ▶ 広報関連出版物

Index List

学術論文 学術雑誌論文、学会での発表論文、使用したスライド、プレプリントなど。	0 items
NII刊行論文集等 NII主催の研究集会の論文集等	0 items
NIIテクニカル・レポート	115 items
紀要等アーカイブ	0 items
データ・プログラム等	1 items
教材等	0 items

総務部企画課長（評価・広報・国際・大学院・研協・社連が範囲）

NIIにはリポジトリが無かった！

- 研究支援部署の企画課で構築・サービスすることに

体制：課長1、企画係（事務系係長係員非常勤職員各1）でURAの協力を得てスモール構築、

専門教員・センター、コンテンツ課で自ら登録してもらう方式

# 2022年- 神戸大学 Kernel



## 研究者紹介 國谷紀良先生

この通信では、Kernel で論文を公開されている研究者をご紹介します。今回は國谷紀良先生(システム情報学研究科)です。

新型コロナウイルスが 2019 年度末に流行し始め、2 年半が過ぎました。新型コロナウイルスの感染状況の予測をほとんどの方がニュースなどで目にされたのではないのでしょうか? そのような予測をされた研究者の 1 人が國谷先生です。國谷先生のご専門は感染症流行の数理モデルで、数学と生物学が融合した数理生物学という応用数学に含まれる分野です。

インタビューでは研究を中心にお話を伺い、①先生のご経歴: 抽象的な数学を学ばれていた國谷先生が数学を社会の中で実際に応用する分野を道路に選択された経緯、

②先生の研究内容や新型コロナウイルス流行で研究・研究分野にどのような変化があったのか? ③研究に関するデータの入手や保管についてなどが話題にのぼりました。その他にも論文をオープンアクセスにされていることや図書館の利用についてもお聞きしました。

インタビューをさせて頂いたなかで、イタリアにあるトレント大学の図書館で國谷先生が本を読まれた話が印象に残りました。イタリア語は読めないけど、数式で内容がわかる。言語を飛び越える数学の抽象性が琴線に触れました。ぜひ、以下のページよりインタビュー全文をご覧ください。

### インタビュー全文

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476337>

Kernel で公開されている國谷先生の論文

[https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/search/advanced/?mode=1&kywd1=A1008&con1=c\\_code\\_auidh](https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/search/advanced/?mode=1&kywd1=A1008&con1=c_code_auidh)



- オープンアクセス推進WG
- 各教員の論文発表状況を確認し登録を進める (著作権ポリシー調査等)
- Kernel通信の発行 (教員インタビュー、統計、情勢紹介等) → 全学ポータル掲示板に

## 特集: ハゲタカジャーナル

本特集では、ハゲタカジャーナル/出版社 (Predatory Journal/Publisher) をめぐる学術出版業界の動向について纏めました。

### ハゲタカジャーナル/出版社に関する問題提起

電子ジャーナルで掲載論文をオープンアクセスにする「ゴールドオープンアクセス (Gold OA)」では、著者側が出版社に APC (Article Processing Charge; 論文処理費用) を支払って公開するモデルが一般的です[1]。オープンアクセスの普及に伴い、APC の不当な取得を目的とした低品質な学術誌とされる「ハゲタカジャーナル」(捕食ジャーナル、相悪学術誌) (\*1)およびその出版社である「ハゲタカ出版社」の問題が顕在化してきました。

2010 年にハゲタカジャーナル/出版社という用語で問題提起を行ったのは、米国コロラド大学デンバー校の図書館に (当時) 勤務していた Jeffrey Beall 氏です[2]。Beall 氏はハゲタカ出版社を「著者支払型の論文出版モデルを、職業上の規範に反して悪用することで利益追求を図る出版社」と定義し、疑いがあるとしたジャーナル/出版社のリストを公表しました(\*2)。大きな反響を呼んだ Beall 氏の調査を契機としてハゲタカジャーナル/出版社が国際的な問題として認知されるに至り、学術界では今日まで様々な検討/情報共有がなされてきています。

### ハゲタカジャーナルの特徴

以下のような特徴を有する学術誌が、ハゲタカジャーナルと称される傾向にあります[2][3]。

- ・ 査読を全く、あるいはほとんど行わないため著しく短期間となる

それは大きい大学  
やからできるんや

うちは人もそんな  
におらんし…

(北大の鈴木に対して)



それは小さい大学  
やからできるんや  
な

(小樽商大の鈴木に対して)

# 各大学のカラーに合った方法で

---

- これまでなかった業務は、とにかく色々試すしかない。失敗こそ大事。
- 勉強より、とにかくやってみる。
- 「図書館の中から飛び出る」

# 「今後の展望」にかえて

---

- 機関リポジトリの役割

- 出版 → 自機関発行物の保存・公開

- 研究論文の公開 → 自機関研究者への研究支援

- 研究データの公開

どれだけ支援できている？

- 図書館の役割

- 図書館専門職の役割